研究主題

自ら課題解決に向かい,「学ぶ楽しさ」を仲間と共に味わえる生徒の育成

～「小集団での学び」を効果的に活用した指導を通して～

１　主題設定の理由

（１）　今日的な課題から

私たちは，人口減少，少子高齢化，グローバル化，情報通信技術をはじめとした急速な技術革新など，激しく変化する社会の中で暮らしている。このような社会の急速な変化は，今後，さらに進展するものと考えられる。変化の激しい予測困難な現代社会において，受け身で対処するのではなく，様々な情報や出来事を主体的に受け止め，他者との対話を通して適切に判断しながら，粘り強く問題を解決していく力が求められている。つまり，他者との関わりの中で自ら課題を解決し，社会にとって意味のある解を提案し，社会自体をよりよい方向へと変化させていくことができる「生きる力」を有した人間が求められている。

また，生涯にわたって学び続ける力や主体的に考える力をもった人材を育成するために，従来のような知識詰め込み型中心の授業から，教師と生徒，生徒相互が意思疎通を図りつつ，一緒になって切磋琢磨し，相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り，生徒が主体的に問題を発見し解を見出していく「主体的・対話的で深い学び」への転換が必要である。

（２）　生徒の実態から

研究が始まった令和３年度の本校生徒は，学習習慣が定着し，落ち着いた雰囲気で授業を受けることができ，学習課題に対し，誠実に取り組み，追究しようとする生徒が多かった。しかし，反応する，表現することに弱さがあり，挙手はあるものの，一部の生徒の発言で授業が進み，多くの生徒は傍観者となっていた。また，全国学力学習状況調査においては，正答率が徐々に下がりはじめており，質問紙での自己肯定感の評価についても全国平均を割る状態が続いていた。そのような危機感から授業改革の必要性を強く感じ，本校の研究を進めていった。

下記の文章は，現３年生Ａさんが書いた２年時の振り返り(一部抜粋)である。

> ①小集団で学び合う時間があって，仲間が教えてくれるようになったことと，その日のうちに家庭学習で復習するようにしたことで，次の授業の先生の話もよく分かり，少しずつできるようになりました。この②分かる感覚は今までで初めてで楽しく，やる気が出て頑張れるようになりました。

また，Ｂさんは振り返りの中に，次のように“学ぶ楽しさ”を感じていることが分かる。

> 毎日の積み重ねが大切で，①仲間や先生と一緒に考えたり，③新しく学ぶことに「なるほど」と納得できたり，新しい発見があったりしたときに楽しさを感じています。

私たちが願うのは，ＡさんやＢさんのように，①のような仲間との学び合いを通して，②にあるように「できた」「分かった」という達成感から得られる次への意欲，さらには，③にあるような教科の本質に迫る“学ぶ楽しさ”を実感している生徒の姿である。

研究が始まった時から行っているアンケート調査によると，令和４年度の３月には「小集団での学び」が有効であると感じている生徒が９０%，一斉授業と比較して前向きに学習に取り組めている生徒が９０%となっている。私たち教師集団が，生徒に“学ぶ楽しさ”を実感できるような手立てを講じてきたことが一定の成果を上げてきていると捉えている。

昨年度までの研究を振り返り，下記のような成果(◯)と課題(●)が明らかになった。

〇授業中，課題に向かって主体的に取り組もうとする姿勢や，態度については概ね高まり定着している。

〇ほとんどの生徒が，仲間と協同して学習活動に向かうことができ，仲間と共に学ぶことが，自らの学習の成果につながっていると実感している。

〇ペア，小集団での学びにおいて，円滑な人間関係の中で学習に取り組むことができている。

▲授業の見通しがもてず，学ぶ楽しさを感じられていない生徒が一部いるため，「学ぶ値打ちのある課題」の設定が必要である。

▲発展的な課題や活用を意図した学習内容において，試行はするものの，うまくいかないと諦めてしまう生徒が一部いる。粘り強く課題解決に向かうために，分からない子・できない子が「どうして？」と質問し，分かるまで問い続ける学習集団づくりが必要である。

これらのことから，小集団の中で学ぶ楽しさを味わわせることで，その経験の積み重ねで自分から学びを求めるようになり，それが主体性や学力の定着に作用していくと考えた。

そこで，学ぶ楽しさを味わわせながら，主体性を身に付けさせる中で，学校教育目標である「心豊かでたくましい生徒」を育んでいくことを研究の方向とした。

研究を進める上で，東京大学名誉教授　佐藤学　氏の「探究と協同の学び」をよりどころにし，「学びの共同体」の哲学やビジョン・システムを基盤に分からないことを分からないと話せる生徒，小集団で表現し続ける生徒を育むことを目指すこととした。

以上の私たちが願う生徒の姿や昨年度までの研究の成果と課題，研究の方向から，研究主題を表題の通り設定した。

２　研究仮説

◇生徒の実態や学習内容の系統性を踏まえ，学びに必然をもたせることができるように指導計画を工夫し，

◇単位時間の指導において教科の特性を生かすとともに，「小集団での学び」を基盤にして，学びを深める指導の工夫を重ねていき，自己の変容を自覚させることができれば，学ぶ楽しさを仲間と共に味わえる生徒を育成することができる。

３　研究内容と実践

研究内容１　指導計画の工夫

（１）生徒の実態や学習内容の系統性を踏まえ，生徒の学びに必然をもたせる指導計画の作成

教科における見方・考え方を位置付けた単元構造図を作成することで，系統性のある指導を行うことができ，生徒が学び方を身に付ける学習ができると考えた。また，何をどのような順で，いつ学ばせていくか…という教師の指導計画が，生徒の学びに向かう意欲に大きく関わると考えた。

数学科では，数学的な見方・考え方を位置付けた単元指導計画の作成（図１ 単元指導計画）と，“Mathematics Connection（図２ 学習関連図）”の作成に取り組んだ。これにより，単位時間ごとに働かせる見方・考え方を計画的に指導できるようになり，指導を焦点化させることにつながった。さらに，学習関連図を生徒が作成することによって，既習内容に立ち返って考えようとする姿も見られるようになってきた。



【図１ 単元指導計画（数学科）】



【図２　学習関連図（数学科）】

研究内容２　指導方法の工夫

（１）生徒が主体的に学び，学習のねらいを達成するための，教科の特性を生かした指導方法の工夫

学習課題は，生徒が主体的に学び，学習のねらいを達成するための「学ぶ値打ちのある課題」である必要がある。そのために，本校では大きく２つの課題を設定している。

①「第１課題（共有の課題）」…基礎・基本
⇒第２課題に取り組むための学び
②「第２課題（深めの課題・ジャンプの課題）」
…応用・発展
⇒第１課題での生徒の捉えと本質とのズレを揺さぶり，課題を深め，よりねらいに迫るための問い（深めの課題）
⇒既習の説明的知識を活用し，仲間と協同しないと解決できない難しい問い
（ジャンプの課題）

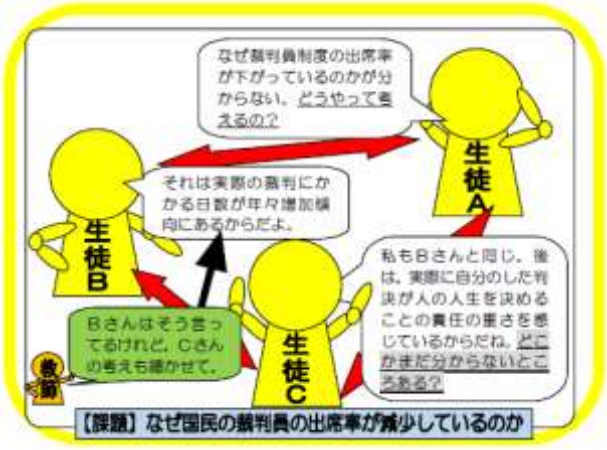
授業の前半は「第１課題（共有の課題）」として教科書の内容について扱い，授業の後半は「第２課題（深めの発問・ジャンプの課題）」として，教科書の内容よりもはるかに高いレベルで，３分の１くらいの生徒たちにしかわからないような難しい内容を設定した。それによって，どの生徒も授業の最初から最後まで受け身ではなく，自ら学びの主人公となり，共同で探究し合う授業をつくっていくことができる。さらに，他者との協働による課題解決型学習を通じ，生徒一人一人が自分の考えをもった上で小集団で学び合うことで，互いの考えを比較することが可能となり，考えを広げたり深めたりすることができるようになる。

（２）「小集団での学び」を基盤にし，学びを深める指導の工夫

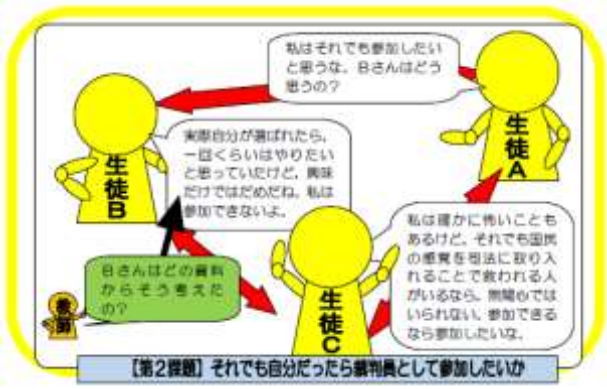
本校における，「小集団での学び」とは，『自力解決をしながらも，困った時には仲間の力を借りて問題を解決したり，自分とは異なった見方・考え方をする他者と対話をしたりすることを通して，自分だけでは到達し得ない学びを実感し，互恵的な学びを成立させる手段』と捉えている。

学習集団が育ってくると，その学び方を身に付けた学級では，教育実習生が授業をしても成立させることができ，教師個人の力量の差を生じさせないよさがあると捉えている。

社会科の公民的分野「国の政治の仕組み」では，第１課題（図３　小集団での学び）を「なぜ国民の裁判員の出席率が減少しているのか」とし，第２課題（図４　小集団での学び）を「それでも自分だったら裁判員として参加したいか」と設定した。



【図３　小集団での学び（社会科）】



【図４ 小集団での学び(社会科)】



【小集団での学びの様子(社会科)】

生徒が「対話は楽しい」と思えるようにするために，教師が授業の中で生徒と生徒をつなぐことを心掛けている。例えば，Ａさんが発表したら，「Ｂさんは今，頷いたよね。どんな点について頷いたの？」などと声をかける。そうすると，Ｂさんは「Ａさんの〇〇という言葉を聞いて，考えの過程がよくわかりました」などと答える。このように，教師が生徒と生徒をつなぎ，生徒たちがつながることのよさに気付き，「対話すると楽しい」と感じることができれば，自然と対話をしていくようになると考えている。

さらに，「わからない」，「どうしてそう考えたの？」などと気軽に言える関係をつくり出すために，「学級の中でわからないのは私だけじゃない」と生徒たちが思えるように，小集団での学びの様子を見て全体交流を適宜行うようにしている。「わからない」と言ってくれた生徒たちの意見を大切にし，「〇〇さんがわからないと言ってくれたおかげで，こんなにも深い話ができたね」など，教師が価値付け，「わからないのは自分だけではないから，ちゃんと仲間に伝えたことで，みんなの学びに貢献していると先生も認めてくれた」という意識をもてるようにした。

また，学びが停滞する小集団においては，学びの進んでいる小集団の生徒の意見を全体交流で全体に広げてから，再度小集団に戻し，それを元に考えさせるようにしてきた。

５　成果・課題

〇単元構造図に，「第１課題」「第２課題」「本時身に付けたい(働かせたい)見方・考え方」を位置付けたことで，単位時間に「どのような生徒の姿を育成するのか」を明確にすることができた。また，単元を貫く課題を設定することで，生徒が見通しをもち，主体的に学習に取り組むことができた。

〇「第２課題（深めの課題・ジャンプの課題)」を設定し，小集団での学び合いの場を通して解決に向かうようにしたことで，仲間に尋ねながら難しい課題にも諦めずに挑戦することができた。また，解決できない生徒の中には，いったん第１課題に戻って学び直してから，再度，第２課題に挑むようになった。

〇課題解決のために，小集団の仲間と協力し，支え合い，探究し合う学習形態をつくることで，どの生徒も対等に学び合うことができている。また，わからなければ尋ねる，尋ねられたら仲間のわからなさに寄り添い，共に考えることができている。

▲第２課題は，生徒の学びの実態に合うように到達度を考慮した課題を設定しなければ，生徒の学びが深まらないことがある。また，第２課題の設定については，教師の深い教材に対する理解や生徒理解が必要であり，教科部や学年での研究協議会が活発に機能しなければならない。

▲第１課題，第２課題共に，小集団内で生徒の考えが絡み合うためには，話し合う内容やそこに登場すべき語句に対する「共通の認識」が必要である。話合いの土台となる既習内容等を教師が事前に予測し，理解が不十分な生徒に他の生徒の考えをつなぐよう授業デザインを工夫する必要がある。

［引用・参考文献］
・文部科学省　2017 中学校学習指導要領
・中央教育審議会　諮問・答申等
・佐藤 学『授業改革の哲学』
・佐藤 学『第四次産業革命と教育の未来
ポストコロナ時代のＩＣＴ教育』